

学生によるプレゼンテーションをリスニングの授業に導入する意義
The Importance of Incorporating Student Presentations in EFL Listening Courses

Tomoko Kawachi

成蹊大学一般研究報告 第46巻第4分冊

平成24年4月

BULLETIN OF SEIKEI UNIVERSITY, Vol.46 No.4

April, 2012

学生によるプレゼンテーションを リスニングの授業に導入する意義¹

The Importance of Incorporating Student Presentations in EFL Listening Courses

河内 智子
Tomoko Kawachi

Abstract

The present study explores the significance of incorporating “mini-presentations” in EFL(English as a Foreign Language) listening courses. Public speaking seems to be a skill on which Japanese students have generally received little training, possibly due to the lack of emphasis on the ability in the current Japanese school curriculum. However, developing Japanese students’ adeptness to express one’s ideas publicly in English is becoming increasingly important not only for students to survive and actively participate in the globalized world but also for the country to maintain its presence in the international community. This paper first describes how elements of student presentation can be systematically incorporated into a course whose main focus is indirectly influencing the improvement of presentation skills per se. The potential benefits of adding presentation components, such as development of delivery skills, increased awareness toward English writing structures, opportunities to use English for authentic communication, peer learning, and improvement in group dynamics are then discussed. Results of student questionnaires subsequently presented suggest that students became motivated in making presentations and that they value public speaking opportunities. Such results also highlight the need to place more emphasis on presentation skills in the English curriculum.

1. はじめに

これまでの筆者の教職経験によると、日本の大学生からは欧米の学生などと比べ、人前で話すことにあまり慣れていない印象を受けることが多い。佐藤(2003)も、プレゼン

1 この論文は、2010年に大学英語教育学会（JACET）全国大会で発表した内容に、加筆・修正を加えたものである。
Tomoko Kawachi: The importance of incorporating student presentations in EFL Listening Courses

テーション能力を「日本人がもっとも苦手とする…能力」(pi)だと指摘しているが、おそらくそう感じているのは筆者や佐藤だけではないだろう。日本人が人前で話すことを苦手とする原因のひとつとして、学校教育における「人前で話す」スキルに関する訓練の機会が比較的少ないことが考えられる。例えば筆者が幼少期を過ごした米国のある小学校では“Show and Tell”と銘打って、クラス全員に自分が興味のある物や珍しい物などを用意させ、それについて自分の言葉で数分間発表させる機会を設けていたが、こうした取り組みは米国の初等教育でよく行われているものである (Anderson, 2000; 川村, 1999)。また、Show and Tell以外にも理科や社会科の授業などで、各自が選んだトピックについて研究レポートをまとめ、その内容についてクラスメートの前で発表する機会があり、幼い頃から人前で話す訓練の場が頻繁に与えられていたように思う。さらに、米国では中等・高等教育段階においてもパブリック・スピーキングやスピーチ、ディベート等のクラスを必修にするなど、個人が自らの考えを明確に主張する方法・能力を養成する教育に力を入れている様子がうかがえる (井・マッカーシー, 2000; 佐藤・古屋, 2008)。

その結果、飯田(2000)も指摘するように、例えば日米の政治家や財界人などが公の場で話す様子を比較すると、もちろん個人差はあるものの残念ながらやはりアメリカの方が聴衆の心に訴えかけるような、いわゆる「うまい」話し方に長けているような印象を受けてしまいがちである。これには日本語と英語の言語構造や文化の違いといったものも少なからず影響していると思われるが、やはり幼い頃からの教育の影響も大きいのではないだろうか。

この点については、自身が旧東ドイツで中等教育を受けた三森 (2002, 2003) も、欧米諸国のみならず欧米文化の影響を受けているアジアやアフリカ・中南米の国々の学校で行われているコミュニケーション・スキルの訓練が日本の学校教育に欠落している事実を懸念を示し、その欠落を埋めることが実は日本人が外国語を習得するための近道であろうと主張している。

日本でも近年、英語カリキュラムの中でプレゼンテーション・スキルに特化した授業を開講する大学は増えているが、全学生を対象にして必修科目に据えている例はまだ主流とは言えないであろう。しかし今後ビジネス・政治・研究等の分野でますます国際化が進み、日本人が英語で口頭発表をする機会が増えて行くと思われる中、学生の英語力もさることながら発信力を高めて行くためにもプレゼンテーション・スキルに特化した授業を開講し、学生に履修させる意義は大きいと思われる。

一方で、そうした大規模なカリキュラムの改革を待たずしても個人の教員が既存の授業の枠組みの中で学生のプレゼンテーション・スキル育成に取り組むことも可能であり、また有意義であると考えられる。そこで本稿では、筆者が担当したりスニングの授業に、学生による身近なテーマについてのミニ・プレゼンテーションを導入した実践例を紹介し、その目的と得られた成果について考察したい。

2. 授業の概要と指導の手順

2.1 授業の概要

今回ミニ・プレゼンテーションを導入した授業は、大学1年生を主対象とした選択必修科目の「インテンシブ・リスニング」の授業3クラスである。この授業は週に1度開講され、授業期間は半期、つまり約14～15週であったため、授業回数は合計で14～15回であった。履修者数は各クラス25名から30名程度で、履修者は1年生が中心ではあったが、クラスによっては1年次にこの授業を履修しそびれた2年生、3年生も相当数受講していた。また、この授業は後期に開講されたが、殆どの受講生は既に前期に同じメンバーでコミュニカティブ・グラマーという授業をやはり14～15週間受講していたため、ある程度互いに顔なじみであったと思われる。

後期の授業では、主テキストとしてアメリカのラジオ放送局、Voice of Americaの英語学習者向けニュースを素材にしたリスニング用のテキスト（『オンラインで学ぶVOAライフ系総合英語』）を使用した。毎回90分間の授業時間のうちの大部分をこのテキストを用いての演習に費やしたが、テキスト導入前の最初の15分から30分程度の時間を用いてミニ・プレゼンテーションを実施した。

2.2 プレゼンテーションの形式について

今回の授業では、冒頭で触れた、米国の小学校などでよく導入されているShow and Tell形式のミニ・プレゼンテーションを導入した（詳細については付録1を参照）。Show and Tellの形式を採択したのは第一に、何かモノを提示しながら話すことによって、発表を聞いている学生の注意や視線が発表者だけに集中することが避けられるため、発表者の過度の緊張が取り除かれる、つまりaffective filterが下がるのではないかと考えたからである。第二に、万が一聞き手が発表者の言っていることを殆ど聞き取れなかったとしても、視覚情報を手掛かりに発表者が何の話をしているのかぐらひは推測ができるだろうという思惑もあった。もちろん、ただ話すだけよりは何か実物がある方が聞き手も興味を持って聞くことができるだろうというねらいもあった。

発表のトピックは“Something that I like”と比較的幅広く設定した。このトピックを選定した理由は、たとえ人前で話すのが苦手な学生でも、自分が好きなものや興味のある事柄についてであれば少しは語れるであろうと考えたからである。

発表時間は1人当たりの持ち時間を約5分間とした。その内訳は、発表が約4分間、質疑応答が約1分間という設定である。各回2～3人ずつが発表すると、約10回の授業で受講者全員が学期中に1回ずつ発表できる計算になる。

2.3 指導の手順

2.3.1 初回の授業

まず後期初回の授業では、学生に付録1のガイドラインを配布し、ミニ・プレゼンテ-

ション実施の目的と概要について説明した。続いて評価基準、すなわちプレゼンテーションの構成要素であるdelivery, body language, language, structure, content それぞれについてどのように気を配る必要があるか、付録1に沿って補足説明をしながら話した。

その後、ガイドラインを具現化するとどのような発表になるのか、イメージを提供するために教員が4分間のデモ・プレゼンテーションを実施した。飯田(2000)も指摘するように、学生はそれまで英語のスピーチを聞いた経験が少なく、説明だけではどのようなスピーチが良いものなのか具体的なイメージがつかみづらいと思われるため、この時点で何かしらの形で英語プレゼンテーションのモデルを提供することは非常に重要であろう。また、学生にはこのデモ・プレゼンテーションを聞きながら付録2：Sample Presentation Structureのワークシートにプレゼンテーションの内容を整理して書き込むよう指示し、発表後、発表の流れ（構成）について確認をした。

さらに、トピック選定と構成の参考になるよう、マインド・マップを用いたブレインストーミングの手法についても簡単に紹介した（付録3参照）。

最後に、第2回目の授業に向けた準備として「自分が尊敬する人物について一分間の短いスピーチ原稿を用意してくるよう」という課題を出題した。

2.3.2 第2回目の授業

第2回目の授業では、各自が宿題で用意してきたスピーチの原稿を用いてdelivery・body languageで大事な強弱・声量・抑揚・目線などを意識する練習をさせた。具体的な手順は以下の通りである。

- (1) 各自の原稿の中で内容語（名詞・動詞・形容詞など）を探し、下線を引くように指示する。その後、クラスメートとペアで、内容語は強く、それ以外の機能語（冠詞・be動詞・助動詞・前置詞など）は弱く、メリハリをつけて読む練習をする。
- (2) 次に、原稿の中で重要な語彙、強調したい個所などの上にスマイルマークを描くように指示する。その後、再度ペアでスマイルマークのところで顔を上げながら原稿を読む練習をする。その際、パートナーは読み手の顔が何回上がったか数え、読み手が予め記したスマイルマークの数と一致するか照合する。
- (3) 続いて4～5人のグループを作り、今度は自分の番になったら原稿を1文1文読む前に見て頭に入れてから、原稿を背後に隠して顔を上げて発表する練習をする。
- (4) 最後に声量を意識させるために、各ペアに教室の端と端に立って、全ペア一斉に互いのパートナーに聞こえるように大きな声で発表し合う。

尚、(2)はWilley(2009)の“An eye contact workshop”(p.15)から、(3)は金谷(2002)の「教科書を背中に」(p.38)というアクティビティーから示唆を得たものである。それまでの筆者の経験から、学生に発表をさせようとするとしても原稿を読み上げる「朗読会」になってしまうため、こうした練習を通じて原稿に依存し過ぎず、目線を上げて発表するやり方を意識させるねらいがあった。また、(4)についてはYamashiro &

Jonson(1997)を参考にしたもので、実は今回は時間不足のために計画通り実施することができなかったが、自分が思っている以上に大きな声で発表しないと聴衆には聞き取れないこと、また腹筋を使って発声することの大切さを身体を使って意識させるために有効なアクティビティーではないかと考える。

実は、ミニ・プレゼンテーションをリスニングの授業に導入した初年度は、事前指導として行ったのは、初回授業でのガイドラインの説明および筆者によるモデル・プレゼンテーション（ワークシートは配布せず）のみであった。その上で第2回目以降の授業で早速学生にミニ・プレゼンテーションをさせてみた結果、こちらの意図をしっかりとんで指示通りに発表を準備してくる学生もいる一方で、ガイドラインから全く逸脱した構成で聞き取りにくい棒読みの発表をする学生もいるといった具合で発表の質・内容に大きなばらつきが出たため、やはりもう少し指導が必要ではないかと反省させられた。とはいえ、リスニング主体の授業であるためそれほど多くの授業時間をプレゼンテーション指導に割くわけにもいかないという葛藤も抱えつつ、少しずつ手直しをしていった結果、上述した指導形式にいたった。この指導法についてはまだまだ今後も改善を重ねる必要があると考えている。

2.3.3 第3回目以降の授業

上記の練習を経て、3回目以降の授業では前述のとおり、各回2～3名ずつがそれぞれに準備してきた“Something that I like”というトピックについてのプレゼンテーションを行った。その際、プレゼンテーションを聞いている学生には発表終了後に質問をするよう促した。具体的には、クラス全員が学期に1度は発表者に質問をすることを単位取得の条件であると伝え、質問が出ない場合には筆者がそれまでに質問をしていない学生を指名した。足場掛けとして初回授業で配ったガイドライン（付録1）に質問例も載せ、参照するように指示した。

また、発表終了後は聞いている学生に「次につながるような」建設的フィードバックをフィードバックシート（付録4）に書くように指示し、同時に発表者本人にも自己フィードバックを書かせ、発表の成果や気づきについての内省を促した。クラスメートからの発表者に対するフィードバックシートは評価者の氏名を切り取った上で発表者本人に渡し、また、担当教員である筆者も発表者一人ひとりに評価点とコメントを記入して渡した。

3. ミニ・プレゼンテーション導入の目的

続いてこうしたミニ・プレゼンテーションを授業内に導入した目的について述べたい。もちろん最大の動機は冒頭にも述べ、また以下3.1でも挙げる通り「人前で話す訓練の場を提供したい」という点であったが、それ以外にもこうした取り組みを通じて様々な目的を達成することができるのではないかと考えた。

3.1 人前で話す訓練の提供 (delivery skillに対する気づきの促進)

第一の目的は、とにもかくにも大勢の人数の前で話す経験を学生に一度させたいとの思いがあった。なぜならひとつには、場数を踏めば踏むほど人前で話すことに慣れるだろうと考えるからである。また筆者自身の経験から言っても、実際に人前で話す経験を通じてのみ、いかにそれが緊張することなのか、そしていかに事前の入念な準備や練習が欠かせないものであるかということをも身をもって実感することが可能だからである。また、そうした経験をした上で、自らのパフォーマンスを振り返ると同時に同級生や教員などの第三者から客観的なフィードバックをもらうことにより、自らの長所・短所や将来の課題を見出すことができる。1クラス25名から30名程度という今回のクラスの大きさは、既存の授業内容と並行して学習者全員に1人で発表させる時間を確保できるという意味でも、また「聴衆」の人数が多すぎず少なすぎない、という意味でも学生が初めてプレゼンテーションをするのに適した環境であると言える。

3.2 プレゼンテーション構成の習得

次に、こうしたミニ・プレゼンテーション指導・経験を通じて学生は英語のプレゼンテーションの構成について学ぶことができる。具体的には、プレゼンテーション原稿に限らず英語の文章構成の基本型であるintroduction (序論)、body (本論)、conclusion (結論)の枠組みや、body (本論)の中では自らの主張についてのsupporting evidence (論拠)を提供するといった論理展開について学ぶきっかけになる。こうした構成は、もちろん日本語のプレゼンテーションにも応用可能である。一方で、日英両言語のプレゼンテーション・スタイルを比較することは両文化のコミュニケーション・スタイルの差異への気づきにもつながる。

Kaplan(1966)が、英語学習者には英語文章の論理展開を明示的に教えることにより母語のそれとの違いについて認識をさせることが不可欠だと提唱して久しいが、Connor(2002)もまた、その後30年余りの対照修辞学の動向を振り返る中で、文章構成にまつわる文化的差異について学習者に明示的に教示すべきというKaplanの考えを基本的に支持している。川村(1999)も指摘するように、プレゼンテーション構成について学ぶことは、一般的に「らせん形」と言われる日本語のコミュニケーションスタイルと、「直線型」と言われる英語のコミュニケーションスタイルの差異について学ぶ好機になる。言うまでもなく、どちらのコミュニケーションスタイルがより優れているかということではなく、状況によって使い分けることができるように学習者のレパートリーを増やすことが目的である。

3.3 英文を用いた自己発信・自己表現の経験・訓練

さらに、こうした取り組みを通じて学生が自らの考えを発信する経験・訓練を積むことができる利点も挙げておきたい。多くの学生が、高校までの英語の授業を通じて「英

作文」と言えば「与えられた和文を英訳すること」と認識している中、本当に自分にとって関心のあることや伝えたいこと、つまりrelevantなトピックについて英語で発信する喜びを味わってもらいたい、換言すれば、英語を言語本来の機能である真の意味での(オーセンティックな)コミュニケーションの手段として使う経験をさせたいという願いがあった。なぜならそうした経験なしには英語はいつまでたっても「学習の目的」ととどまり、「自己表現の手段」と認識されることがないからである。先述の川村(1999)も、英語教育へのプレゼンテーション指導の導入が強く望まれるさらなる理由として、英語を用いてこの「自己表現」「自己実現」を果たすことができる点を強調している。また、Yamashiro & Johnson(1997)も、英語学習者がプレゼンテーションを通じて自らの考えを表現できることに喜びを感じている様子を報告している。これからの国際社会で日本人が発信力を高めていくために必要なのはまさにこの英語における自己表現能力ではないだろうか。

また、自らの考えをうまく伝えようと思うと自然と聞き手の持つ予備知識や興味の対象、また場合によっては聞き手の英語力などについての考慮、すなわち聴衆分析をすることになる。したがって今回のこうした取り組みは、辞書に過度に依存せず易しい言葉を用いて思いを伝える訓練にもなるのではないだろうか。

3.4 他の学習者からの学び

ここからはどちらかというと発表者ではなく発表を聞く側の学生に対してのねらいになるが、4点目として、他の発表者から作文や発表方法について学んで欲しいという意図があった。Dörnyei & Murphey(2003)は、学習者と年齢、社会的地位等が近く、かつ学習者が模範とすることのできるような他者を“Near Peer Role Model(NPRM)”(p.128)と称し、NPRMの生産的な言動や役割が他の学習者の刺激となり、成長を促すことを指摘している。先に述べたように、教員が自らモデルを提供することは必要かつ有効であるが、教員の英語能力や興味の対象・年齢等は学習者のそれと距離があることが多い。したがって、学習者はむしろ自分と英語力や興味の対象・年齢が近い同級生からこそ大いに学び、刺激を受ける可能性が高いであろう。クラスメートの発表を聞いて自分とさほど英語力や人生経験等は変わらないはずなのになぜうまく聞こえるのか、あるいはなぜあまり効果的な発表でないと感じられるのか分析し、その気づきを自らの発表に活かすことができる。この点については牧野(2003)も自身のプレゼンテーション指導の中で、学習者にクラスメートの発表から気づいた点についてまとめさせるという工程を何度も繰り返させており、その工程を通じて実際に学生が他者のプレゼンテーションがなぜ効果的なのか分析し、様々なことを学びとっている様子を報告している。

3.5 リスニング能力の向上

5点目として、発表を聞いている学生のリスニング能力向上が期待できるのではない

かとも考えた。プレゼンテーションという発話能力の向上という側面だけに焦点が当たりがちだが、毎回毎回違う発表者による発表を聞くことは、聞き手にとってはリスニングの練習になる。英語の非母語話者の発話はリスニングの教材として適切ではないという考えもあるかもしれないが、いまや全世界的にみても英語の第二言語話者の数は第一言語話者の数を上回っており、地域によっては第一言語話者・第二言語話者間のコミュニケーションの手段としてよりも、第二言語話者同士の共通言語として用いられる頻度が高いとされる(Jenkins, 2009)。つまり、今後はEnglish as an International Language、あるいはEnglish as a Lingua Francaとしての位置づけがますます高まるであろう英語の地位を鑑みると、英語学習者は母語話者だけではなく、非母語話者の話す英語にも慣れておく必要があるということである。例えば日本人にとっては、ビジネスなどの分野で接触頻度が高いと考えられるアジア人の英語などがその対象になろう。その手始めとして、最も身近な英語の非母語話者である同邦の日本人の英語を聴きとる訓練と言うのは決して無駄にはならないであろう。

特に、同じ学習現場を共有する同級生が身近な題材について話すShow and Tellのような内容の場合、聞き手にとっても興味のあるトピックを扱う可能性が高く、また、前項で述べたNPRMとして学べることも多いと考えられる。そういう意味では、むしろ一般的な英語教科書のような、ややもすると学生たちの日常生活とはかけ離れた題材を扱うリスニング教材よりも、内容を聞き取ろうとする学生の動機は高まるのではないかとさえ考えられる。

3.6 クラスのグループ・ダイナミクスの向上

最後に、こうしたプレゼンテーションを通じて学生たちは共に学習する仲間や彼等の関心事についての知識を得ることができる。Dörnyei & Murphey(2003)は、学習者同士が互いについてよく知ることが望ましい学習者間の関係醸成に寄与し、学習者の共同体としてのグループ・ダイナミクス向上に貢献すると主張している。さらにDörnyei(2001)は、学習者同士が互いのことをよく知ることにより学習者グループの団結力が高まり、結果として個々の学習者の動機が向上するとしている。こうした主張はDewey(1938)の「教育とは本質的に社会的なプロセスであり、その質は個々人が共同体の形成にかかわる度合いに応じて実現される」(p.58)とする哲学とも合致する。こうした指摘の通り、プレゼンテーションを通じて学生同士が互いに理解を深めることができればクラス全体のグループ・ダイナミクスに好影響を及ぼし、ペアワークやグループワークで行う言語活動もよりスムーズかつ効果的に行われるのではないかと考えられる。

要はせっかく一学期間、あるいは前期も含めると二学期間同じ教室で共に勉強するのであれば、クラスメートのことを知っていた方が互いに興味・関心も増し、共通の話題もできるなど、授業に来る楽しみが増えるのではないかと考えたのである。

4. 受講者の声（受講者アンケートの結果）

以上のように発表する学生、発表を聞く学生双方にとって様々なメリットがあると考え、リスニング中心の授業に取ってミニ・プレゼンテーションを導入してみたのだが、こうした取り組みについて受講生はどのように感じたのか、彼等の声を、事前・事後アンケートの結果を通じて紹介したい。

4.1 プレゼンテーション経験について

ミニ・プレゼンテーションについての学習者の反応を紹介する前に、実際にどれだけの学生が今回の授業受講以前にプレゼンテーションを行った経験があったのか、事前アンケートで尋ねた結果を提示したい。

4.1.1 日本語でのプレゼンテーション経験について

まず、この授業を受講する以前に学校の授業内で日本語でプレゼンテーションをした経験があるか聞いたところ、70%の学生が「ある」と回答した（図1）。ただし、その半数近くが大学生になってからの経験だとのことであった。したがって、大学入学以前に学校でプレゼンテーションを経験していた学生の割合は、日本語でも実際には約3分の1ということになる。

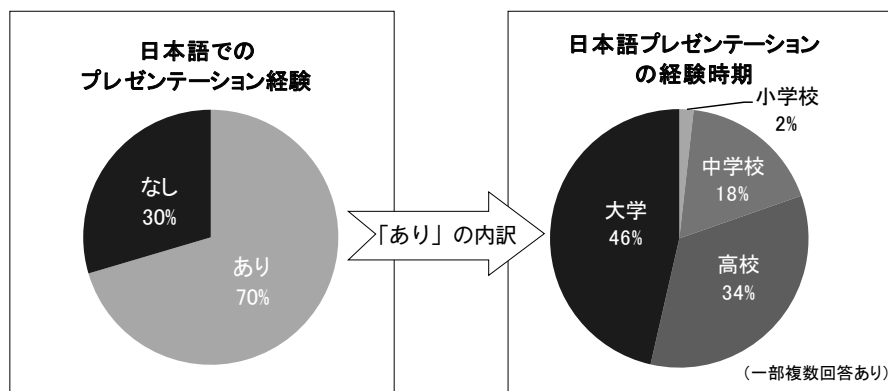


図1：日本語でのプレゼンテーション経験の有無 (N=71)

4.1.2 英語でのプレゼンテーション経験について

さらに英語でのプレゼンテーション経験について聞くと、「あり」と答えた学生は全体の約3割、その中で大学入学以前に経験したことがある学生がやはり約半数だったため、大学入学以前に英語でプレゼンテーションをしたことのある学生は実際には約17%しかいなかったということになる（図2）。また、プレゼンテーションをやっただけではなくプレゼンテーションについての指導を実際に受けたことがある学生となると、さらに少ないことが推察される。

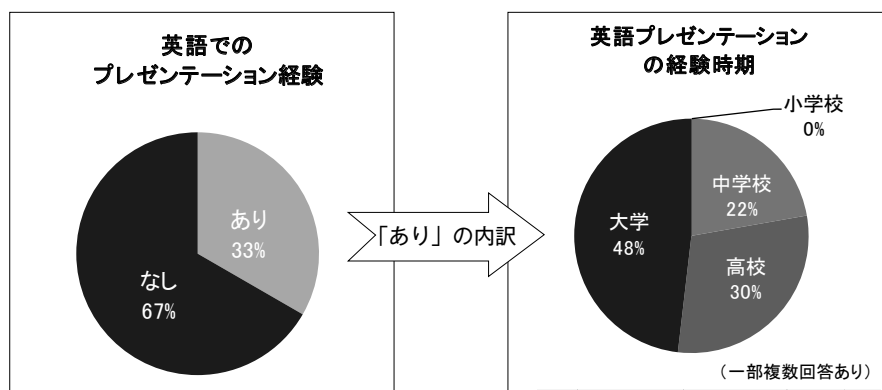


図2：英語でのプレゼンテーション経験の有無 (N=72)

4.2 プレゼンテーションをした経験から

次に、学生たちが今回リスニングの授業でプレゼンテーションを経験してどのようなこと学び、感じたのか、回答結果を紹介したい。

4.2.1 発表をして役に立ったこと

まず、今回発表をしてどんな点が役に立ったと感じたのかを5段階評価の回答結果の得点の高かった順番にグラフにしたものが図3である。各項目の下に表示されている数字がその項目に対する回答の平均得点である。

まず受講者は、教員やほかの学生からの自身の発表に対するフィードバックが最も役に立ったと感じたようである。また9割以上の学生が、英語のプレゼンテーションの構

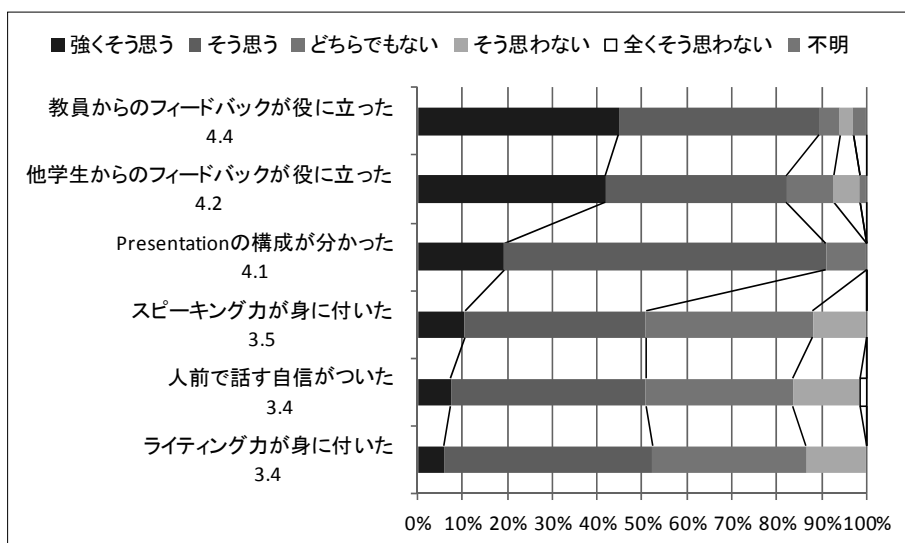


図3：発表をして役に立ったこと (N=67)

成が分かったと答えている。さらに、約半数の学生がdelivery skillに当たるところの「スピーキング力」、「人前で話す自信」、そして自らの関心事について発信する「ライティング力」が身に付いたと考えていることが分かる。

4.2.2 発表を聞いて役に立ったこと

続いてクラスメートの発表からどのような学びがあったかという問いに対する回答を図4にまとめた。

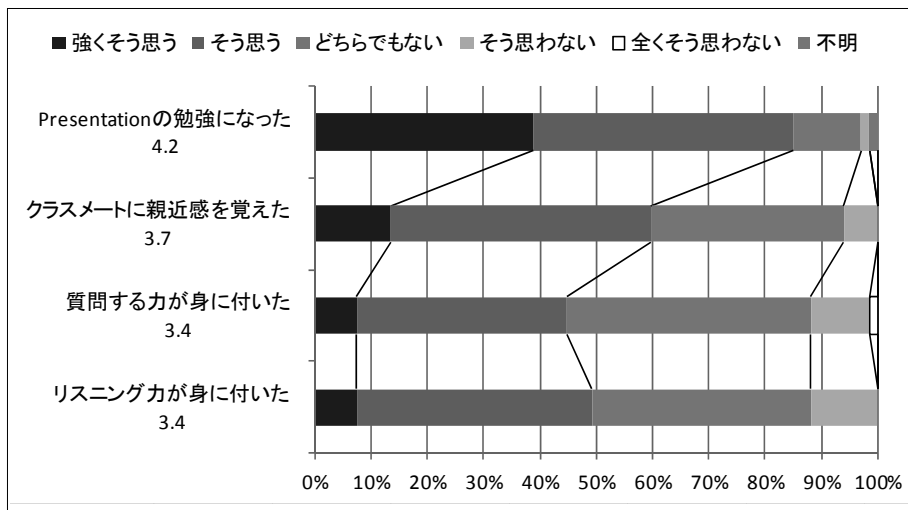


図4：他の学生の発表を聞いて役に立ったこと (N=67)

結果を見ると、9割近くの学生がほかの学生の発表を聞いてプレゼンテーションの勉強になったと答えており、先述のNear Peer Role Model (NPRM)の機能が有効に作用していることが見て取れる。また、クラスメートのプレゼンテーションを聞いてクラスメートに親近感を覚えたかどうかという点については約6割の学生が肯定的に捉えている。この数値は期待していたほどは高くなかったとはいえ、ミニ・プレゼンテーションがグループ・ダイナミクスへの何かしらの好影響を及ぼした可能性は十分にあると考えられる。実際に、授業終了後に共通の趣味を持っていると判明した学生同士がその話題について話したり、発表を聞いた学生が発表者にさらに質問を投げかける光景なども見られた。教員である筆者自身も学生の意外な趣味などが分かって学生により親しみが持てたと同時に、例えばアメリカンフットボールについての記事が教科書に出てきた時に、アメリカンフットボールについて発表した学生にルールについて聞くなど、インタラクティブな授業の展開にも役立った。

質問する力についてはなかなか難しかったようで、身に付いたと答えた学生は半数以下であった。ただ、クラスによっては筆者が指名するまでもなく自発的にどんどん質問

が出るクラスもあったし、Whで始まる質問が効果的だと言うことは何となく理解してくれたのではないかと感じられた。

最後に、プレゼンテーションを通じて同級生の英語を聞きとる能力が身に付いたと答えた学生は全体の半数程度であった。

4.3 プレゼンテーションに対する意欲の変化

次に、今回の発表を通じて学生のプレゼンテーションに対する意欲に変化があったかどうか調査した。具体的には、授業前のアンケートと授業後のアンケートで「(英語、あるいは日本語で)プレゼンテーションをやりたいか」という質問をし、その回答結果を比較してみた。その結果、全体的にプレゼンテーション意欲の向上傾向が見られた。

4.3.1 日本語のプレゼンテーション意欲の変化

まず日本語でのプレゼンテーションに関しては、授業実施前はやりたいと回答した学生が半数以下(47%)であったが、実施後は66%の学生が日本語でもプレゼンテーションをやってみたいと回答した(図5)。

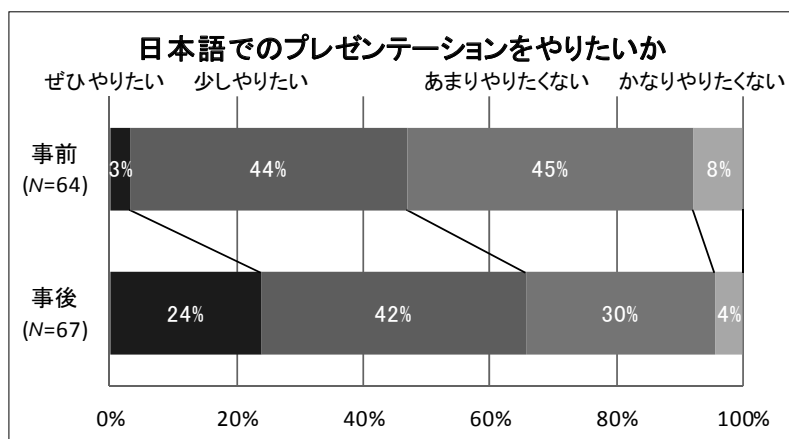


図5：日本語でのプレゼンテーションに対する意欲の変化

4.3.2 英語のプレゼンテーション意欲の変化

また、英語でのプレゼンテーションについても図6のとおり、事前の調査では6割以上の学生がやりたくないという消極的な回答をしていたが、事後の調査ではこれが逆転し、7割近くの学生が英語でのプレゼンテーションを再度やってみたいと回答した。おそらく一度やってみて自信がついた、あるいは逆に自分の課題が見えてきたためそこを次は克服したい、といった意欲の表れではないかと考えられる。

学生の自由記述コメントからも「プレゼンテーションは難しいけどやってよかった」「最初はいやだったけど、やってみると自分の良さや悪い点が分かったのでいい勉強に

なった」「実際にみんなの前で行ったという事実が今後につながると思った」など、やってみたからこそ得られた発見に対する気づきや「もっともっとちゃんと取り組みばよかった」「回数をこなせば確実にうまくなると思った」といった、今後に向けての反省や意欲が感じられた。

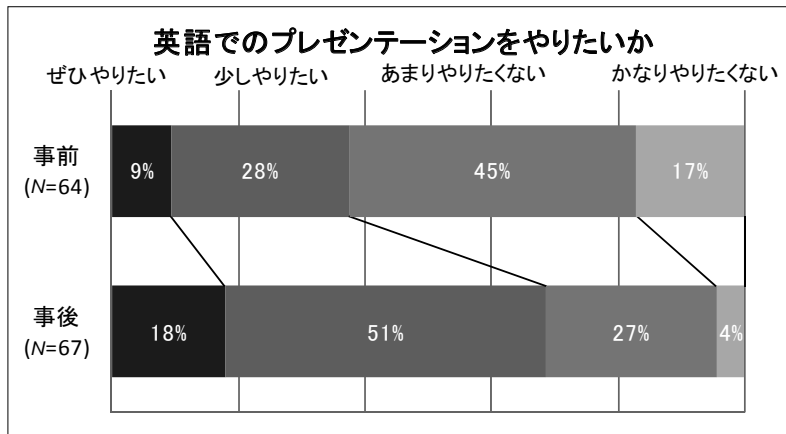


図6：英語でのプレゼンテーションに対する意欲の変化

4.4 大学でプレゼンテーションについて教える意義

最後に、大学でプレゼンテーションについて教える意義の有無について聞いたところ、図7に示す通り99%の学生が「意義がある」と回答した。また「あまりない」と答えた学生が1名いたが、その理由は「中学や高校などのもっと早い段階でやらなきゃいけないことだと思うから」というものであった。つまり、どの学生も学校教育の中でプレゼンテーションについて教えることは有意義であると考えていたことが分かった。

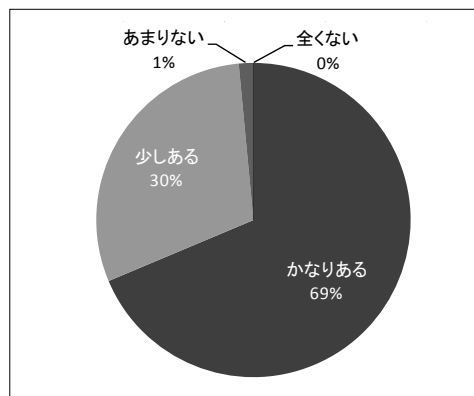


図7：大学でプレゼンテーションについて教える意義の有無について (N=67)

プレゼンテーションについて教える意義として圧倒的に多く挙げられたのは、「将来

役に立つから」「社会に出たら必要なスキルだから」といった社会の要請にこたえるものであるからとするものであったが、ほかにも「人に何かを教えてもらうということとは違う学びが得られるから」といった能動学習の利点や、自己表現の訓練になるといった点を指摘する声があった。

5. まとめ

これまでに述べてきたとおり、プレゼンテーションそのものを中心に据えた授業ではなく、リスニングを中心にした授業にプレゼンテーションの指導や実践を導入する意義は多岐にわたると考えられる。今回の取り組みからは、特にdelivery skillの向上や英語のプレゼンテーション構成の習得、クラスメートの発表からの学び、他者フィードバックからの気づきといった面で一定の効果が得られたと言えよう。

しかし同時に、1度きりの発表では学んだことをすぐに活かす次の機会がなかなかないため、せつかく学んだことを活かさきれないのではないかという懸念も生じる。初めての発表で文章構成・声量・強弱・抑揚・目線など、全ての点に気を配るのは不可能である。実際に学生の発表を見ていても、原稿はうまく書けているのに目線が全く上げられていない例、声量はあるが抑揚がついていない例など、今回の発表の反省を活かせば次回はよりよい発表ができるはずだと思わせるものが多かった。本来であれば学生1人あたりに何回かの発表機会を与え、「今回は声量」「次回は目線」と徐々に改善を重ねて行くことが望ましい。また、学生自身もプレゼンテーションの指導を学生時代に受けておきたいと考えていることから、やはり本来であればプレゼンテーション能力により焦点を当てた授業を高等教育、あるいはそれ以前の段階で全ての学生に提供するのが理想的であろう。

ただしそういったことが実現不可能な場合には、また、実現したとしてもそれをさらに強化する意味で、リーディングやライティング等、どのスキルに焦点を当てた授業でも何かしらの形で学生にプレゼンテーションをさせる機会を設けることには大きな意義があるのではないかと、今回の実践を通じて改めて認識した。なぜなら、ある学生のコメントにもあった通り「少しでも経験があるといざやる時に違う」からである。

佐藤(2003)は、「日本人がもつ発言に対する消極的な態度は、おおげさにいえば、今や国際的損失としてとらえ直さなければならない」(p.34)と主張しているが、学生のプレゼンテーション能力向上に取り組むことは、学生たち自身が大学生活、就職活動、社会人生活において持てる能力を最大限に発揮する手助けになるのはもちろんのこと、国際社会で日本の存在感や発言力を高めるためにも、国家として取り組むべき大きな課題の1つでもあると言えるのではないだろうか。

参考文献

井洋二郎・マッカーシー V. ランダル (2000). 『英語ビジネススピーチ実例集』. 東京: ジャ

パンタイムズ.

- 飯田朝子 (2000). 「英語教育におけるプレゼンテーションの指導について—慶應大学経済学部Study Skills 2000のケースから」. 『慶應大学大学院文学研究科英米文学専攻コロキア』 No. 21, 49-60.
- 金谷憲 (2002). 『英語授業改善のための処方箋:マクロに考えミクロに対処する』. 東京:大修館.
- 川村正樹 (1999). 『英語力向上のためのスピーチ学習入門』. 東京:リーベル出版.
- 佐藤啓子(編著) (2003). 『プレゼンテーション:言語表現能力の開発(改訂版)』. 京都:嗟峨野書院.
- 佐藤仁・古屋武夫 (2008). 『自分の主張をはっきり伝えるシンプル!英語スピーチ』. 東京:あさ出版.
- 三森ゆりか (2002). 『論理的に考える力を引き出す—親子でできるコミュニケーション・スキルのトレーニング』. 東京:一声社.
- 三森ゆりか (2003). 『外国語を身につけるための日本語レッスン』. 東京:白水社.
- 牧野由香里 (2003). 「プレゼンテーションにおける自律的学習のための学習環境デザイン」. 『日本教育工学雑誌』 No.27, 325-335.
- Anderson, C. (2000). Show and tell: A practical approach to lower-level speeches. *The Language Teacher Online*, 24(1). Retrieved August 19, 2009, from <http://www.jalt-publications.org/tlt/articles/2000/01/anderson>
- Connor, U. (2002). New directions in contrastive rhetoric. *TESOL Quarterly*, 36, 493-510.
- Dewey, J. (1938). *Experience and education*. New York: Collier Books.
- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z., & Murphey, T. (2003). *Group dynamics in the language classroom*. Cambridge University Press.
- Jenkins, J. (2009). *World Englishes* (Rev. ed.). Oxon, U.K.: Routledge.
- Kaplan, R. B. (1966). Cultural thought patterns in inter-cultural education. *Language Learning*, 16, 1-20.
- Willey, I. (2009). An eye contact workshop. *The Language Teacher*, 2009, 33(4), 15-16.
- Yamashiro, A. D., & Johnson, J. (1997). Public speaking in EFL: Elements for course design. *The Language Teacher Online*, 21(4). Retrieved August 19, 2009, from <http://jalt-publications.org/tlt/files/97/apr/yamashiro.html>

使用教材

- 吉田信介・吉田晴世・池田真央子 (編著) (2002). 『オンラインで学ぶVOAライフ系総合英語 (On-line VOA English <Life>)』. 東京:松柏社.

付録1：プレゼンテーション・ガイドラインのサンプル

Show & Tell: Presentation Guidelines

今後、みなさんは授業で、職場で、プレゼンテーションを行う機会が必ず出てきます。この授業ではその練習として、英語形式のプレゼンテーションを一人一回行います。Show & Tell とは、何かを見せ(show)ながら話す(tell)ことです。つまり、視覚と聴覚両方にうったえるミニ・プレゼンテーションです。時間は一人4分間、テーマは“Something that I like”とします。自分が好きなものについて語ってください。[例:好きな場所・行ってみたい場所、人、スポーツ、食べ物、店、本、映画、趣味、動物(ペット等)など、何でも OK]。但し、話すだけでなく、何か、みんなに見せる(show)ことができるものを用いて発表すること。[例:写真、絵、ポスター、食べ物、作品等の小道具]。また、時々メモを見ながら話すのはいいですが、書いてきたものを棒読みするのは絶対にやめましょう。

Purpose(目的)

The purposes of the presentation are for you to:

- practice public speaking
- listen and learn about your classmates and what they like
- teach your classmates about you and yourself

Evaluation Criteria(評価基準)

1) Delivery(話し方):

◇ Voice(声):

- ✓ みんなに聞こえるような大きな声で、はきはきと話していますか？
- ✓ 大事なことを強調しながら抑揚をつけて話せていますか？

◇ Pace & Pause(間):

- ✓ いっきに話すのではなく、話題が変わる時、注意をひきつけたい時等に間をとっていますか？
- ✓ 話す速度は遅すぎたり早すぎたりしませんか？

2) Body Language(ジェスチャー等):

- ✓ 下やメモばかり見ずに、聴衆と目を合わせながら話していますか？
- ✓ 姿勢を正し、両足の重心を置き、必要に応じて手を使ったり、歩き回ったり、目線をクラス全体に向けたら、身体全体を使って話していますか？
- ✓ 笑顔☺で話していますか？

3) Language(言葉):

- ✓ 分かりやすい言葉で説明していますか？難しい言葉は説明していますか？
- ✓ 意味の通じる文章になっているか確認できていますか？

4) Structure(構成):

- ◇ Introduction(導入「つかみ」):まず自己紹介をし、何を述べるかを述べる。(Good morning, My name is Cathy. Today I would like to talk about...など)
- ◇ Body(本論):ある物を好きな理由や背景、その性質等を3つぐらいに分けて説明する。(First of all, Second of all, Lastly,などのつなぎ言葉を使うとまとまった感じになる。)
- ◇ Conclusion(結論「しめ」):何を述べたかを述べる。(Today, I talked about _____. Thank you for listening to my presentation.など。)
- ◇ Question & Answer(質疑応答):Do you have any questions?など。

5) Content(内容):

- ◇ 分かりやすく、興味を持てるような内容になるよう工夫されていますか？
- ◇ Visual Aid(視覚にうったえるもの)を効果的に用いていますか？

☞ どんなに話し上手な人でも効果的なプレゼンテーションは一朝一夕にはできません。必ず家で何度も練習をして発表にのぞみましょう。また、困ったことや質問があれば気軽に相談してください。

Presentation Schedule

10/14	(学生氏名)	(学生氏名)	(学生氏名)
10/21	(学生氏名)	(学生氏名)	(学生氏名)
10/28	(学生氏名)	(学生氏名)	(学生氏名)
11/4	(学生氏名)	(学生氏名)	(学生氏名)
11/11	(学生氏名)	(学生氏名)	(学生氏名)
11/18	(学生氏名)	(学生氏名)	(学生氏名)
11/25	(学生氏名)	(学生氏名)	(学生氏名)
12/2	(学生氏名)	(学生氏名)	(学生氏名)
12/9	(学生氏名)	(学生氏名)	
12/16	(学生氏名)	(学生氏名)	
12/23	(学生氏名)	(学生氏名)	
1/13			

注)原則的には、発表当日に欠席した場合、発表の評価はゼロになります。もしどうしても発表予定日に休まなくてはならない場合は事前に誰かと替わってもらうよう各自で相談しておくこと。

Listeners: Q&A の際には質問をしてください。学期中、必ず最低一度は質問をすること。

例)What is your favorite ~? / When did you start ~? / Why did you start ~? /

Where did you ~? / How long did it take you to ~? /How many times ~? / Who did you ~ with?

/ Have you ever ~? / How much is the ~?

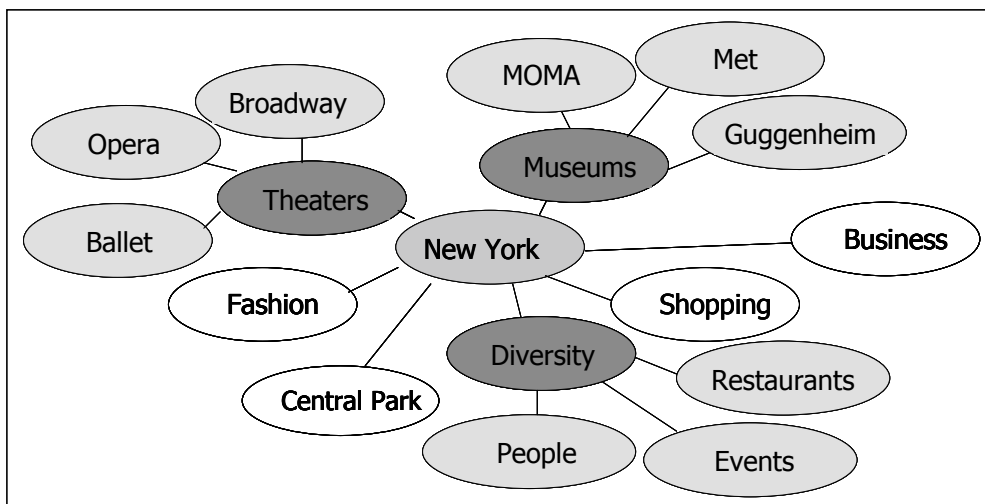
付録2：Sample Presentation Structure 確認のためのワークシート

Student ID #: _____ Name: _____

• Sample Presentation Structure

Topic: (_____)	
Introduction	
Body	Main Point 1: (_____) Examples/Explanation: (_____)
	Main Point 2: (_____) Examples/Explanation: (_____)
	Main Point 3: (_____) Examples/Explanation: (_____)
Conclusion	

付録3：ブレインストーミングのためのマインド・マップ



注) 例えばニューヨークというトピックについて発表する場、ニューヨークという単語から思いつく言葉 (Museums, Diversity, Theaters など) を書き加えて行き、さらにそこから連想される言葉 (Museums であれば MOMA, Met, Guggenheim など) を加筆していく。その結果、アイデアが膨らみそうな言葉を Main Point 1, 2, 3 に据え、文章を展開させていくという方法。

付録4：フィードバックシートのサンプル

Show & Tell Feedback Sheet

Your Name: _____ Presenter's Name: _____

Criteria (基準)	(4: very good 3:Good 2:So-so 1. Needs work)	Score (1-4)
Delivery (話し方)	✓ Voice : 声の大きさ、抑揚	
	✓ Pace & Pause : 話す速さ、間の取り方	
Body Language	✓ Body : 目線、姿勢、表情	
Language (英語)	✓ Language : 言葉の正しさ、分かりやすさ	
Structure (構成)	✓ Introduction, Body, Conclusion, Q&A の流れ	
Content (内容)	✓ Visual Aid (物) を効果的に使っているか	
	✓ 内容は分かりやすく工夫されているか	
Total (合計)		

Presentation Topic:

感想・建設的意見等:

PRINTED BY
SEIKO-SHA CO. LTD.
1-5-15, NISHITUTUJIGAOKA, CHOUFUSHI, TOKYO

Seikei University
3-3-1, Kichijoji-Kitamachi, Musashino-shi,
Tokyo, 180-8633 Japan